なないろの筆

李家正文著

李家正文著

なないろの筆

法政大学出版局刊

著者略歴　明治四十二年広島県呉市に生まれた。国学院大学国文科卒業。広島女学院専門学校講師を経て、朝日新聞記者、同社日本古典全書、年鑑、小学生朝日新聞各編集長、出版局大阪編集部長となり、現在東京本社図書編集部長。

著書に、厠考（昭和六年六文館）降る話（同九年一誠社）純文学概論（同十二年建設社）古典の窓をひらく（同二十三年桜花学園出版部）厠史話（同二十四年六興出版社）象（同年共著目黒出版社）らくがき史（同二十五年実業之日本社）厠風土記（同二十八年東和社）らくがき昭和史（同三十一年河出書房）などがある。

随筆　なないろの筆

昭和三十三年五月十五日発行

著者　李家正文

発行者　相島敏夫

印刷・製本　鎌倉印刷

© 1958

著者との諒解により検印省略

定価　350円

・発行所・

法政大学出版局

東京都千代田区富士見町

振替・東京九五八一四番

乱丁・落丁の場合はお取替え致します

もくじ

葡萄の伝 ―植物のいろ―

花の咲いている屋根……二
四角な竹……七
年輪の発見……一三
枇杷葉湯……一三
陸に生えるワカメ……二五
葡萄の伝……二八

金の眼・銀の眼の猫 ―動物のいろ―

鳥は手紙を運ぶ……四八
海を渡るネズミの群れ……五三
風景を食う虫……五八
金の眼・銀の眼の猫……六七
鳴き龍と鶯張り……七四

砂の芸術 ―鉱物のいろ―

南極の石……九四
砂の芸術……九五
石畳みの道……九九
毒の流れる川……一〇一
埋れ木……一〇五
古代の砥石……一〇九
翡翠は越の産で出雲で攻玉……一一三

へのへのもへの ―人間のいろ―

卵から生まれた人たち……一二四
深夜のビルの幽霊……一三九
へのへのもへの……一四三
塔上の奇蹟……一四九
上代の戯画展……一五一
らくがき天国……一五四
厠の美……一六六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

象の渡来 ―歴史のいろ―

象の渡来……一八八
埃の宮の校倉……一九六
登呂の囲への疑問……一九八
火事の落首史……二〇三
薬となった糞尿譚……二一四
戻ってきた太陽……二二〇
十六むさしの源流……二二九
魔女の裁判……二三四

京の七色 ―地理のいろ―

京の七色……二四〇
僧都の音……二四三
山中越え……二四五
栂尾の茶園……二四八
大和の国の薬師寺……二五二
棄てられていた観音……二五六

股のぞき……二六〇
知らぬ火の海……二六四

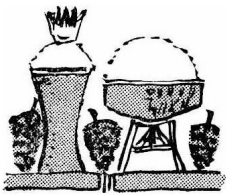
本を読んでいる像　―文学のいろ―

冷凍された女流作家……二七〇
本を読んでいる像……二七三
初演の『源氏物語』……二七八
富士山は麗美か……二八三
現在の時空に生命がある……二九三
文章のGO・STOP……二九六
くすりの語原……二九八
かえりぶみ……三〇一
出版にあたって……三〇七

葡萄の傳

——植物のいろ——

・花の咲いている屋根
・四角な竹
・年輪の発見
・枇杷葉湯
・陸に生えるワカメ
・葡萄の伝



花の咲いている屋根

夏山を彩るヤマユリの花が真白く咲くころになると、大和路を室生から赤目、香落渓へと急ぐハイカーたちが、きっと今年も眼をみはったであろうことがある。

それは、室生の民家の藁屋根に、毎年ユリが芽生えて、数輪の花をひらき、高い香りを漂わせているからである。

いつか初夏のころ、わたくしが東北地方に出かけたとき、十和田湖に通う山のなかで、自動車の上から眺めた幾棟も幾棟も、草花の咲いている聚落の屋根の美しさは、いつまでも忘れることのできないものであった。十和田では、屋根を葺くとき、もっくれという土をのせてつき固めるのだが、幾年もたつと、そこへ草や木が生え、夏から秋にかけて色とりどりの草花が咲く。そして、トンボが飛び交い、虫がすだき、野趣ゆたかな情緒をくりひろげるのである。

都から、こんな遠くまで出かけるにもおよばない。ふと見る車窓に、草花のある屋根のある風

景――これは、列車が横浜駅を出て保土(ほど)が谷(や)から戸塚へ走るむかしの東海道の松並み木に点綴(てんてつ)する変わった民家の屋根にもみられた。草葺き屋根のいただきにハチスが生えていて、なにかしら都会人のこころを慰めてくれた。

保土が谷の民家の屋根が、いったい、いつごろからこんな風なのか知らないが、それにしても、この草のある屋根の風景は、ふるい民家の姿の名残りであろうと思われる。

わたくしは、学生のころ、東京と故郷を通う列車の窓から、いつも、ぼんやりと映ってゆくさまざまな景観を愛(め)でていたが、そのなかで眼にとまったもののひとつに農家があった。農家の屋根の姿が、沿線の地方地方で異なっているのを、ノートにスケッチしながら考えたことがある。

たとえば、京都の山崎あたりでは、ふんだんに屋根に竹が使ってあるかと思うと、山国では杉皮ばかりである。藁(わら)屋根にかわって、茅(かや)葺きのところもあるといった風なのは、やはり風土が影響する農村の自給自足の経済に出発しているのだと直観した。その地方地方にある産物が、経済的にも風土的にも、いちばん材料にかなっていたからということが知られた。

それにしても、この保土が谷の屋根の変わった趣きに、大そうこころをうたれて、それからよく注意してみると、箱根あたりまであることがわかった。

徳富蘆花(ろか)が、『自然と人生』のなかで、水の濁った利根川を渡って、前橋のほうに半里歩いた春

十和田の民家の屋根

雨後の上州を、「此あたりの人家の屋根には、概ね菖蒲をうゑたるが、折しも五月初旬の事なれば、濃き薄き紫の花、浅緑の葉まじりに簇々と咲き出で、茅舎も花簪して立つ思あり」といっているが、まこと東北本線の那須野あたりから郡山にかけて、このような屋根があって、それからずっと北に続いているのを見たことがある。

松浦竹四郎が、江戸から蝦夷地の探検に出かけたとき、『知床日誌』にチトラエの窟にはいって泊った夜、「岩壁に仮りねする窟におふる石小菅葺きし菖蒲と見てこそはねめ」と詠んだのも、旅路の途中に見た菖蒲の花の咲いた屋根の思い出であったのではなかろうか。

東北地方のこどもが聞かされているご飯を食べないお嫁さんの話しに、むかしむかし一人の桶屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、飯を食べない嫁をさがしていたら、志望者があらわれた。ところが、その嫁は米を大そう食べるので、ひまを出したのはよいが、山姥が化けてきたのだった。桶屋は山姥に追われて、谷川の川原に菖蒲が繁り、よもぎの生えている草むらにかくれて、やっと助かった。しょうぶの葉が山姥の右の目をつき、よもぎの茎が左の目をついたので、山姥は盲になって谷川に落ちて流れていった。その日が、ちょうど五月五日だった。このような草屋根は、岩手県西磐井郡長島村にもあった。

一茶の『八番日記』に、

家根の薹花まで咲いて落ちにけり

というのがある。

すると、この種の屋根は、信濃路にもあったらしい。

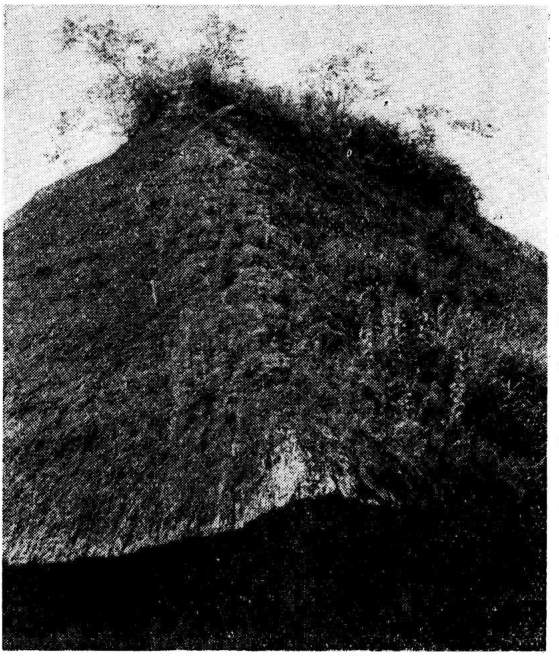
那須野と保土が谷との間の武蔵野では、東京を挾んで、もうそんなものを見ることはできないと思っていたが、あるときに南部線で立川に出かけたとき、多摩川の鉄橋を渡って、京王線と交叉してすこし行ったあたりに、民家の物置き小屋の屋根の上に、草の生えていたのを発見した。

これらの草花の生えている屋根の分布は、これでおよそ知られるが、まだ確かなものはできあがってはいない。

『万葉集』巻の第十五に、雪の連宅満の墓の秋色を詠んだ歌がある。

秋はぎの散らへる野辺の初尾花　仮廬に葺きて雲離れ

遠き国辺の露霜の寒き山辺にやどりせるらむ



花の咲いている屋根

これは、きっと宅満を埋めた上に、尾花を屋根に葺いたものであろうか。

屋根に、ぺんぺん草を生やすことは凶事として忌まれる伝えがある。それにもかかわらず、これらの地方で、なんの憂いもなく、草花が屋根の頂きに咲き乱れるのは、まことにほほえましい。

板橋倫行氏は、わたくしのこの話しに興味をおぼえて、

たんねんに歩いたり、古書を探りだして、その結果を雑誌『日本歴史』の三十二年二月号に発表された。

それによると、明治二十三年鎌倉で小泉八雲が、屋根に菖蒲が繁って紫色の花が咲いていたことを、その著『知られぬ日本の面影』に紹介しているということだし、藤田元春氏の『日本民家史』には、九州阿蘇の外輪にあたる大分県直入郡の波野あたり宮地街道の村にも、羊歯科の植物や菖蒲などがあるということを記している。

わたくしの母は、明治四十年ごろ、広島の上流川(かみながれかわ)にこんな草のある屋根の家が数軒あったことを語っているなど、もういちど、この稿は増訂しなければなるまい。

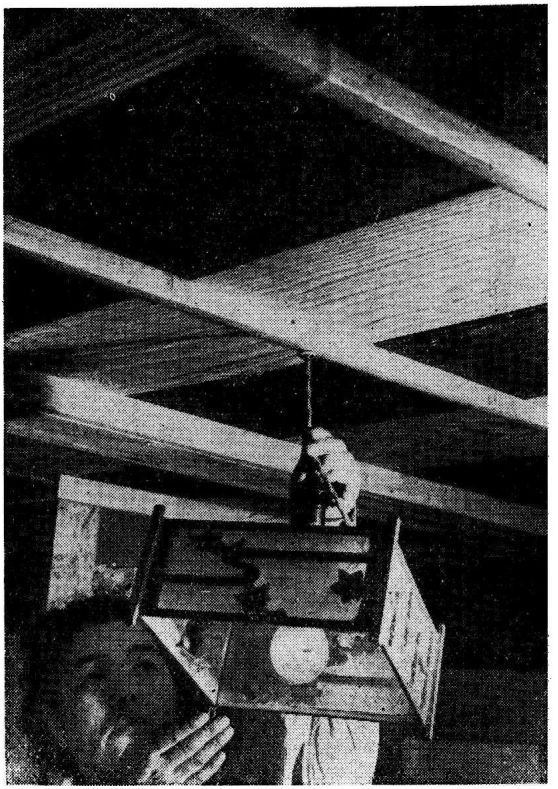
四角な竹

いつか、どこかの茶室で小さな四角い竹が使われているのを見たことがある。

世のなかには珍らしい竹もあるものだなと感心して、人に聞いてみると、これは角竹といって、

ことであった。

あるとき、京都の二条陣屋に行った。すると、ここの庭の隅にその角竹が十数本植わっている



天井に使われている角竹

孟宗竹の一種だということであった。そんな角竹はいったいどこに生えているのだろうかと探し求めると、ある人が、それは茨城県矢井田町の竹藪にありますよと教えてくれた。なんでも、一寸角ぐらいの大きさで、五、六尺ぐらいにのびて群がっているという

のを見た。これは珍らしいというと、こんな竹は、二条城にも醍醐寺にもありますよと教えてくれた。これは気がつかなかった。

ところが、そんなちゃちな大きさとはちがって、このごろでは、もっと大きい四角な竹があちらこちらにあらわれている。料亭の数寄屋づくりの床の間や、濡れ縁に何本も使われているのをみると、これでは珍らしくないほど四角い竹が生えているにちがいないということになる。花筒になるくらいならまだしも、こんな風に、ふんだんに建築材料になるのには、なにか解せないものがある。

神奈川県中郡比比

四角い竹

多村字伯母様に、四角い竹の藪がある。ここは、秦野町大道の竹商山口岩次郎さん所有の竹藪で、一反歩にわたって四角い竹が育成されている。中郡地方事務所の加藤技師が、上田京大教授のヒントでこの四角い竹をここで作ることにしたのだそうだ。筍が六月ごろ三尺ぐらいにのびたとき、同じ高さの四角い木のわくをはめておくと、丸い竹の茎が四角になって、晩夏のころ一丈二尺ぐらいにのびるのである。

いうなら、四角い竹は人工竹で、自然に生えたものではない。やわらかい筍が木わくのかせで四角にもなるし、三角のわくだと三角の竹にもなる。板を両方からあてておけば扁平にもなろうという人の戯れである。

人工の四角い竹は、ここばかりではない。

竹の産地、京都の乙訓郡、もっと詳しくいうなら、新京阪の電車に乗って、新向日町、大山崎あたりのことだが、このあたりでもつくっている。春の暮れから初夏にかけて竹林をたずねてみると、あちらこちらに、板のわくをそえた若竹が目につくのがそれである。また、綴喜郡田辺町天王でも農家が片手間にしているし、愛媛県周桑郡田野村でも近ごろつくりはじめた。

これらの竹のわくは、およそ二か月でとって、うすめた塩酸を竹にふりかけ、葉緑素の化学変化により茶色の模様をつける。筍をみて、生育後の太さを考えてわくの大きさをきめるのがむつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com